

【新連載】〈黄帝と老子〉雑観 第1回

黄帝は誰のことかと黄帝は言い

『黄帝内経』は天人合一の医書である

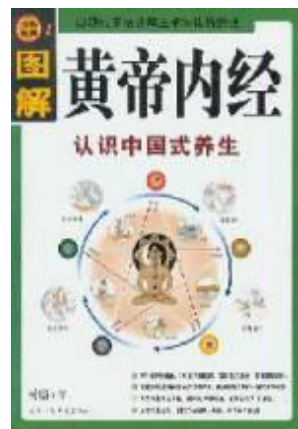
『黄帝内経』 研究家 松田博公

ツイート 3

中国の『黄帝内経』書ブームはまだ続いているらしい。2011年のユネスコ世界記憶遺産登録が弾みになったようだが、タイトルに『黄帝内経』とあっても、中身は単なる薬膳本だったり、表紙にチベットの仏画を配したりする噴飯物の便乗組も多いのでご用心。しかるに、北京の書店の棚に一般人向けの『黄帝内経』書が並ぶようになったのは、だいぶ前からである。王洪図、銭超塵など高名な『内経』学者へのインタビューを含む全60回のテレビドキュメンタリー本『黄帝内経』（花城出版社、2004年）などは、レベルの高い教養書である。以後、陸続と増えたこれら『黄帝内経』啓蒙書の総数は、玉石取り混ぜて恐らく100冊を超えるだろう。

それに比べて、わが国では、普通の読者を対象に書かれた『黄帝内経』本は、わたしの知る限り1冊の新書があるだけである。ことほどさように、黄帝は中華の民の帝王であり、ご威光は海を隔てたわが扶桑には及んでいない。そのまつろわぬ東夷の民の眼で『黄帝内経』を読み解けば、もしかして、黄帝陛下の心肝を寒からしめる、いやもとい、靈魂を癒し、日本鍼灸の守護神に迎えることができるやもしれぬと思うのである。

まず最初に、「黄帝」とは誰なのか、もっと端的に、『黄帝内経』にはなぜ「黄帝」の名が冠されているのかを問うてみよう。いうまでもないが、現在、『黄帝内経』という名前の書物は存在しない。現存の『黄帝内経素問』『黄帝内経靈樞』を呼ぶときに、いちいち並列するのは面倒なので、まとめて『黄帝内経』としているだけなのである。しかし、約2000年前の漢代には、『黄帝内経』の実物があつたらしい。後漢に書かれた歴史



今週号のPRの部屋はこちら

- 変形徒手矯正術セミナー (2014/1/26)
- ていしん入門セミナー (2014/2/23)
- 在宅ケア実践セミナー (2014/4/5,6)

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)

★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

★詳細は≫ [こちら](#)

★メディカル求人天国
鍼灸マッサージ師・柔道整復

書『漢書』の芸文志という篇は、漢代の書物の目録である。その方技略の項目に、医書名が記録されている。

『黄帝内経』十八卷
『外経』三十七卷
『扁鵲内経』九卷
『外経』十二卷
『白氏内経』三十八卷
『外経』三十六卷
『旁篇』二十五卷
右医経七家、二百一十六卷

当然にも、この『黄帝内経』の正体はいかにという議論は長く続けられてきた。定説とされてきたのが、晋代の皇甫謐（214—282）が、『鍼灸甲乙経』序文に述べた「今有り、鍼経九卷、素問九卷、二九、十八卷、即ち内経なり」という見解であった。晋代には、今は『靈枢』と呼んでいる『鍼経』と『素問』が存在し、それぞれ九巻で、足すと十八巻。巻数がぴったりだから、二つを合わせたのが『漢書』芸文志の『黄帝内経』に違いない、という数合わせである。それが現在、どのように論破されているかは、この先、おいおい述べることにしよう。ともかく、古くはこの皇甫謐の見解から昨今まで、『黄帝内経』の成書年代や編集方針、思想、刺鍼技術などが喧々囂々（けんけんごうごう）、語られてきたが、『黄帝内経』が「黄帝」の名を冠する理由については、まともに考察された形跡がない。ただ、「黄帝は伝説上の三皇五帝の一人で医療の創始者である。その偉大なる帝王の名前にあやかり権威付けを図った」などという、昼寝に似たる怠惰な説がまかり通るばかりである。

いや、昼寝とは言い過ぎた。『黄帝内経』と同じ思想圏にあると目される漢代の淮南王劉安編『淮南子』には、「世俗の人、多く古（いにしえ）を尊びて、今を賤しむ。故に道を為す者は、必ず之を神農、黄帝に托して後、能く説に入る」とある。書物の価値を高めんと、黄帝の令名に仮託する輩が昔からいたというこの指摘に目を眩まされ、それ以上、考えてはこなかったのである。

◇「黄帝」はどんな思想、理念の表明なのか

だが、本に書名を付ける目的は、権威にあやかりたいだけではあるまい。扁鵲の名が付けられた『扁鵲内経・外経』は、『史記』扁鵲倉公伝の記述から推すところ、脈論を主とする流派の医書であろう。『白氏内経・外経』の白氏が、黄帝の主治医、岐伯を指すのなら、黄帝派の系列から起こった別派の医書かもしれない。名が体を表すものならば、では、「黄帝」とはどんな思想、理念の表明なのか。

この設問は、1973年以降の、中国における出土文献研究とともに成立したのである。それ以前、そのように問いかけた者は誰もいなかった。この

師の求人情報は≫≫ [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は≫≫ [こちら](#)

年、湖南省長沙の馬王堆漢墓から、現存の『老子』とほぼ変わらない帛書『老子』などたくさんの文献が見つかった。その中に、『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経』などわれわれに親しい鍼灸医書、房中書、導引図とともに、『漢書』芸文志に記載のある『黄帝四経』かもしれない黄帝と臣下の政治篇が含まれていたのである。



戦国末から漢初にかけて、中国の政治世界に、黄帝の思想と『老子』の思想を折衷した、その名も黄老思想という学術潮流が登場し、とりわけ漢初の宮廷政治に大きな影響を及ぼしたことは、『史記』に語られ、早くは郭沫若の研究論文「稷下の黄老学派の批判」がある（『十批判書』1945。翻訳は『中国古代の思想家たち（上・下）』岩波書店、1953、1957所収）。しかし、戦国期の黄老思想書は亡佚し、典拠となる文献を欠くため、研究は停滞していた。突如、前漢時代の墓から現

れた、未見未聞の「黄帝書」は、その状況を一変させ、黄老思想研究は、80年代には中国思想史の主題として認知される。やがて、学者たちは、いわゆる「黄帝書」に、共通の性格があるのかという問題に逢着する。というのも、『漢書』芸文志には、医書以外にも多くの「黄帝書」の名前が次の如く記載されているからである。

- 『黄帝四経』四篇
- 『黄帝銘』六篇
- 『黄帝君臣』十篇
- 『雜黄帝』五十八篇
- 『力牧』二十二篇、托之力牧、黄帝相
- 『諸子略・陰陽家』
- 『黄帝泰素』二十篇
- 『黄帝説』四十篇
- 『黄帝』十六篇
- 『封胡』五篇、黄帝臣、依托也
- 『風后』十三篇、凶二卷、黄帝臣、依托也
- 『刀牧』十五篇、黄帝臣、依托也
- 『鬼容区』三篇、凶一卷、黄帝臣、依托
- 『黄帝雜子气』三十三篇
- 『黄帝五家曆』三十三卷
- 『黄帝陰陽』二十五卷
- 『黄帝諸子論陰陽』二十五卷
- 『黄帝長柳占夢』十二卷
- 『泰始黄帝扁鵲俞拊方』二十三卷
- 『神農黄帝食禁』七卷

『黄帝三五養陽方』二十卷

『黄帝雜子步引』十二卷

『黄帝岐伯按摩』十卷

『黄帝雜子芝菌』十八卷

◇内経全書はみな天を言う

いったい、政治学、天文学、兵学、曆学、陰陽学、占術、房中術、神仙術など多くのジャンルにまたがるこれら一群の「黄帝書」に、共通する思想、理念があるのか。あるとしたらそれは何か。この設問に、出土文献を綿密に検討して明確な回答を与えたのは、日本の学者、浅野裕一である。浅野の700ページを超える大著『黄老道の成立と展開』（創文社、1992）の内容は、いずれ紹介することがあろう。さしあたってここでは、浅野が戦国末の思想界に、荘子、老子学派と並ぶ独自の黄老学派が存在したこと、「黄帝書」とは、「天地の気の上下の循環と四季折々の変化に順って政治、人事、その他もろもろの術を行う」という理念に拠る書物であったことを論証してくれたことで十分である。すなわち、「黄帝書」とは、領域はさまざまにまたがるが、共通の理念で括ることのできる書物であり、一言でいえば、天人合一の術数の書、あるいは方技の書であった。



では、浅野の労作の扉を閉じて、われわれの推論を始めよう。浅野が触れていない、『黄帝内経』とはいかなる書物なのか。彼の結論を敷衍すれば、「黄帝」のタイトルが、すでにして内容を語っている、中を読まなくても分かるのである。すなわち、『黄帝内経』とは、天地宇宙の気の運行の法則に則り医療を行う天人合一の医書でなければならない。

その通り。これは、論証などと大上段に振りかぶらなくとも、誰でも黙って開けば、ぴたりと分かる明瞭な事柄なのである。戦国末の儒家、荀子は、荘子の思想を「天に覆われて人を知らず」と評したが、『黄帝内経』の思想も天に覆われている。ざっと眺めた印象では、現存の『素問』の半分、『靈枢』の三分の一の篇が、天人合一に言及する。その他の篇も、一見、生理学、病理学や鍼灸技術論だけが展開されているかに見えようとも、本当の理解は、天人合一観を下敷きにしなければ得られない。試みに若干の語句を挙げてみよう。

「人と天地相参じ、日月と相応じる也」（『靈枢』歳露論）

「それ、人は地に生まれ、命を天に懸く。天地気を合する、これを命（なづけ）て人という。人よく四時に応ずる者は、天地これが父母となる」（『素問』宝命全形論）

「天は陽たり、地は陰たり、日は陽たり、月は陰たり、大小月三百六十日一歳を成し、人亦之に応ず」（『素問』陰陽離合論）

「人の天道に合するや、内に五蔵有り、以って五音、五色、五時、五味、五位に應ずるなり。外に六府有り、以って六律に應じ、六律は陰陽諸経を建てて之を十二月、十二辰、十二節、十二経水、十二時、十二経脉に合する者なり。此れ五蔵六府の天道に應ずるゆえんなり」（『靈枢』経別）

「天は六六の節を以ってし、以って一歳を成し、人は九九を以って制会し、計（かぞ）うるに人また三百六十五節有りて、以って天地をなして久し」（『素問』六節蔵象論）

「清陽は天に上り、濁陰は地に帰す。是の故に天地の動静、神明之を綱紀と為す。故に能く以て生長収蔵し、終わりて復び始まる。ただ賢人は上は天に配して以て頭を養い、下は地に象（かたどり）りて以て足を養い、中は人事に傍（なら）いて以て五蔵を養う」（『素問』陰陽応象大論）

こうした言葉が持つ豊かな臨床的意味については、今後、吟味することがあるだろう。中華民国の名医、恽鉄樵（うんてつしょう）は、このような章句が繰り返される『黄帝内経』の思想の本質を、「内経全書はみな天を言う」と端的に表現している。まことに至言である。

「黄帝」は、仙人になって登天した神話の帝王にあやかる命名であるなどと、お茶を濁している時代はもう終わりである。「治するに天之紀に法らず、地之理を用いざれば災害至る」（『素問』陰陽応象大論）（注）と喝破した医書は、「黄帝」以外の名を冠することはできなかつたのである。

（注）「治療をするのに、天の法則、地の法則に則らなければ、病気が治らないだけでなく災いや害が生じる」。「紀」も「理」も「筋道」という意味であり、綱紀、紀元、道理、理論などの熟語から類推できる。「天の法則」は、陰陽・四時・六氣（春夏秋冬、生長収蔵、風寒暑湿燥火など）であり、「地の法則」は五行、五味などである。五蔵六府も、天六地五という天地の法則に合致している。『黄帝内経』を枠づけるこれら多数多様な概念装置は、宇宙大に絡まり、それを基礎に大きな臨床像を描くことができる。その範囲は読み手の想像力に任されていて、経文を辞書的に追えば自動的に分かるものではない。

松田博公（まつだ ひろきみ）

1945年神戸市生まれ。元共同通信社編集委員、東洋鍼灸専門学校卒。著書に『鍼灸の挑戦』（岩波新書、第19回問中賞受賞）、『日本鍼灸へのまなざし』（ヒ

ューマンワールド、日本伝統鍼灸学会創立40周年記念賞受賞)、対談集『日本鍼灸を求めてI、II』(緑書房)など。

 ツイート { 3 }

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

[HOME](#)

HUMAN WORLD
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [お宝市場](#) | [求人天国](#)

[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.